

CNALレポート・ジャパン

Conferencing industry News report, research & Analysis - CNA Report Japan

創刊：1999年12月

発行日：毎月15日・月末

取材・編集・発行：橋本啓介

テレビ会議・ウェブ会議・電話会議システム専門 定期レポート

Vol. 14 No.20 2012年10月31日号

編集:editor@cna.jp 広告:pr@cna.jp 読者登録:<http://cna.jp>

Copyright 2012 CNA Report Japan. All rights reserved.

製品・サービス動向-国内

メディアプラス、英 StarLeaf 社のビデオ会議クラウドサービス、テレプレゼンス製品の販売を開始

株式会社メディアプラス(東京都千代田区)は、音声・ビデオ会議システムメーカーである StarLeaf 社(スターリーフ、英国)の製品およびサービスの販売を開始したと発表。(取材:10月10日)



「これまでのテレビ会議市場は、解像度の向上を目指して各社が競ってきたところが大きかったが、これからは、ease of use、つまり誰でも簡単に使える魅力を如何に製品に持たせるかが市場での差別化に影響を与えるだろう。たとえば、従来のパソコンもそうだった、CPU 処理能力の向上が競争のベンチマークになっていたが、その処理能力も今や充分なレベルまで来た。今はアップル社のスマートフォンやタブレットのように誰でも簡単に使える魅力のある端末を如何に実現するかは競合各社はしのぎを削っている。いわば、テレビ会議市場も、ブロードバンドの広がりや端末の性能が充分なレベルまで来たことから、同様な市場競争の原理が働いてくるのではないかと見ている。また、それと



並行して音声・ビデオ・データのユニファイド化は不可避のトレンドだろう。私は、それらを見越して市場において先鞭をつけるべく、

ease of use と H.323/SIP 相互接続性を実現する StarLeaf 社を立ち上げた。」(StarLeaf 社 会長 Mark Richer 氏、写真左下)

CNA レポート・ジャパンの読者の中では、この Mark Richer 氏の名前から思い出す人も多いかもしれない。Richer 氏は、この StarLeaf 社を立ち上げる前は、タンバーク社に買収(その後、タンバーク社はシスコ社に買収された。)された Codian 社を立ち上げた人物だ。その前は、Madge Network 社(LAN) やシスコに買収された Calista 社(IP ビジネスフォン)を立ち上げた経歴を持つ。

Codian 社は、テレビ会議システムにはとりわけ相互接続に関する課題があることから、メーカを問わずあらゆるテレビ会議端末を接続する多地点接続サーバを、満を持して世に送り出したのは 2003 年。各社のデータ共有の違いを吸収して異機種間での多地点接続を実現し業界では知名度を上げ、2007 年 9 月にタンバーク社が Codian 社を 2 億 7000 万ドルで買収した。

「Codian 社は相互接続の課題解決にフォーカスした事業だった。一方、今回の StarLeaf 社は、クラウドをベースに、インフラからエンドポイントまで包含したソリューションを低コストで実現した。これまで大企業向けだった高品質だが高コストなテレビ会議システムを、今度は SMB ユーザに開放したいと考えている。しかし競争は激しい。その中で、市場で優位に立つためには、ease of use を如何に実現するかが鍵を握っていると考えている。」(StarLeaf 社)

Mark Richer 氏は、これまでベンチャー立ち上げを共にやってきた Mark Loney 氏(CEO)、William MacDonald 氏(CFO)とともに StarLeaf 社を 2008 年に立ち上げた。以来、3 年をかけて、ease of use の有るべき姿を目指して試行錯誤を行ってきた。

その試行錯誤から見えてきたものは、ease of use を実現する上で、システムがユーザにとってシンプルであること、また、映像や音声、データなどシステムが高品質であることが大前提になるということだ。ユーザが日々使うものだからだ。この2つをバランス良く形にしたのが、StarLeaf ソリューションだと Richer 氏はいう。

「たとえば、リモコンは、テレビ会議の“悪魔 (devil)”だ。従って、シンプルで直感的なユーザインターフェイスの開発に徹底的にこだわった。私たちの生活に浸透したスマートフォンやタブレットのタッチスクリーンによるあの魅力ある操作性を StarLeaf の端末の操作環境で実現した。ワンタッチで全てが操作できる。」(StarLeaf 社)

StarLeaf ソリューションは、クラウド型サービスとそのサービスで使われる端末群からなる。簡単であること (easy)、いつでもすぐできる (instant)、どこでもできる (anywhere) がコンセプトだ。

そこで同社からは、あらゆるシチュエーションから使うことを想定して、タブレットからパソコン、そしてデスクトップ、ルームまで揃った端末製品を提供する。

(1)「StarLeaf Breeze(スターリーフ ブリーズ)」: Windows、MacOS、iPad で動作するソフトウェア。タブレット(iOS)については 2013 年 年明け頃のリリース予定で、Android についてはその後予定されている。



(2)「StarLeaf Phone(スターリーフフォン)」: タッチパネルを搭載した VoIP ビジネスフォン。



(3)「StarLeaf PT Mini(スターリーフ PT ミニ)」: デスクトップ PC 用ディスプレイにつなげるだけでコラボレーション端末にするボックス装置。



(4)「StarLeaf Personal Telepresence(スターリーフ パーソナル テレプレゼンス)」: ディスプレイ、マイク、スピーカー、コーデックなどを内蔵したオールインワンデスクトップビデオ会議システム。



(5)「StarLeaf Group Telepresence」(スターリーフ グループテレプレゼンス):会議室向のビデオ会議システム。



上記製品では、ease of use 実現のためユーザの操作画面は全製品で統一されている。従って、ひとつの端末で操作を覚えれば他の端末でも同じ操作画面なので混乱することはない。

また、これら製品の中でStarLeaf Phoneが基本になる。このStarLeaf Phone と他の StarLeaf Breeze、StarLeaf PT Mini、StarLeaf Personal Telepresence、StarLeaf Group Telepresence のいずれかと組み合わせて導入することになる。

なぜならば、StarLeaf Phone は単なる電話機能をもつ端末ではなく、タッチスクリーンによるシステムの制御端末としても動作するためだ。ただし、VoIP コールのみ希望の場合は、StarLeafPhone のみの導入で大丈夫だ。そして導入後、必要であれば各ビデオ製品を追加すればよいだけだ。

端末の機能としては、多機能を目指すよりもできる限りシンプルな必要最小限の機能に絞った。「どんなに多機能にしてもユーザはほとんど使いこなせないのが普通だ。であれば必要な機能のみ提供するのが道理だ。その分ユーザのコスト負担も減る。」(StarLeaf 社)

StarLeaf のユーザ画面には、アドレス帳、コール、着信、転送、多地点会議設定、データ会議設定、留守録、プレゼンス、ワンタッチボタン、簡易 ACD 機能(複数端末の同時着信鳴動)などぐらいいかない。画面のデザインやメニューの配置などはとてもシンプルで洗練されている。「普段使わ

ないような機能は省いた。これでたとえば半日かけた操作トレーニングが必要だという人はいないと思う。数分画面をいじってみるだけですぐに操作を覚えられるはずだ。」(StarLeaf 社)

一方、端末をセットアップする時間もほとんどかからない。実際にCNAレポート・ジャパンの橋本もセットアップを経験した。端末を LAN につなげるだけでセットアップは完了すぐに音声やビデオコールが行える状態になった。加えて、LAN が PoE に対応していれば AC 電源は不要だ。

ただし、最初に箱から出して初めてLANにつなげる時には、12桁の機器認証番号(クラウドにログオンするためのもの)の入力が必要となっている。しかし手間としてはこれだけだ。

この StarLeaf のクラウドサービスに加入すると任意の通話番号(ダイヤルプラン)が割り当てられる。ユーザはこれによりお互いの端末を呼び出す形になるが、この番号は、インターネットの環境があればどこでも同一番号で相手につながるようになっている。

「たとえば、私は今日本にいる。イギリスにいる私の同僚が私の番号をコールしたとしても、彼は私が日本にいることを知らないかもしれないが、私の端末が StarLeaf クラウドにログオンしている限り世界どこにいても同一番号で着信を受けることができるし、それで通話や多地点会議をすることもできる。あるいはデータ会議も。また、着信できないときは、クラウド側で、音声もしくは映像による留守番を受けることもできるし、指定の番号へ転送をかけることもできる。もちろんこれら全ての通話のセキュリティは保たれている。」(StarLeaf 社)

このクラウドサービスは、現在、東京を含めたワールドワイド複数箇所にアクセスポイントを設けてグローバルなStarLeafクラウドネットワークを構築している。このグローバルネットワークは、ユーザが最寄りのアクセスポイントに接続することで高品質なサービスを受けられることを主眼としている。今後、ユーザ数の増加に応じてアクセスポイントの増設を行う計画となっている。

今回、StarLeaf 社と国内販売で提携したメディアプラスはStarLeafの製品およびサービスに自信を見せる。「今後、これまでのオンプレミスに加え、クラウドも企業にとっては主要な

通信プラットフォームになるはずだ。そこで StarLeaf 社の製品・サービスは、ワールドワイドに幅広く受け入れられると確信している。Richer 氏とは、Codian 社時代から懇意にしてお互い信頼関係にあり、メディアプラスは、アジア初の StarLeaf 社販売代理店になる。日本国内においては当社が窓口になって StarLeaf 製品を日本の企業の皆様に紹介していく。」(メディアプラス 代表取締役 尾崎 修司 氏)

*記事内写真：メディアプラス資料

ソニービジネスソリューション、10ポート多画面分割対応のローコスト HD 多地点接続用サーバを発表

ソニービジネスソリューション株式会社(東京都港区)は、ローコストで導入可能なオールインワン型 HD 対応多地点接続用サーバ「PCS-VCS10EX」の販売を開始した。(7月30日)

PCS-VCS10EX は、2010年3月に発売された「PCS-VCSシリーズ」から2機種目の多地点接続用サーバとなる。これら PCS-VCS シリーズの多地点接続用サーバは、専用端末機に内蔵された MCU 機能とは違う単体のサーバとなる。

PCS-VCS10SET は、接続可能端末数が最小の10から最大500まで拡張ができる1Uラックマウント型のサーバ。最大同時会議数は4となっている。



一方、今回発表された PCS-VCS10EX(タワー型、写真左、ソニー資料)の接続可能端末数は、10のみでまた最大同時会議数も1のみとなっている。

「PCS-VCS10SET は500ポートまで拡張できるが、その分導入コストもかかる。しかし10ポートあれば充分のユーザも多い。そのため今回、低コストモデルの発表で導入しやすくした。」(ソニービジネスソリューション)

システム構成例



システム構成例(ソニー資料)



多画面分割例(ソニー資料)

PCS-VCS10EX の主な特長は以下の通り。(1)ビデオ会議画面を最大10分割で表示可能。(2)1080p/30fps、720p/30fpsに対応。(3)H.323 HD 端末とSD 端末の混在会議が可能。端末種別に応じたクリアな映像を実現している。(4)H.323 ゲートキーパー機能を標準搭載。DHCP 環境でも IP アドレスを意識しない運用が可能。短縮番号などでビデオ会議端末を呼び出せる。(5)Web 操作による端末の一括バージョンアップ機能。登録された複数のビデオ会議端末をネットワーク経由でファームウェアを一括バージョンアップ。(6)共有アドレス帳機能。PCS-VCS シリーズにビデオ会議端末からアクセスすることで常に最新のアドレス帳をダウンロード利用。なお、端末のアドレス帳にはプレゼンス情報も表示できる。(7)Windows PC からもビデオ会議に参加可能。(8)プリセット会議。MCU の設定に関するもの。ユーザでは難しいため出荷前にソニーにおいて設定して顧客に供給している。

ソニーでは、ビデオ会議端末において、これまで内蔵 MCU を利用した多地点機能を主に提供してきた。

しかし、内蔵 MCU では、複数台のビデオ会議端末を管理する上で必要となる、ゲートキーパー、共有アドレス帳、ビデオ会議端末の一括バージョンアップ、会議予約（PCS-VCS10SET のみ）、会議室アクセス制限（PCS-VCS10SET のみ）、などの機能を提供することができない。加えて、多地点接続用サーバでは多画面分割は可能であるが、内蔵 MCU ではカスケード接続時（7 拠点以上）は単画面のみとなっている。

こういったことから、内蔵 MCU では難しかった点についてユーザの使用状況から仕立て直したのがこの PCS-VCS10EX である。加えて、エンタープライズでの安定使用を想定して電源 2 基を装備している。

なお、ISDN については、内蔵 MCU モデルでの利用をソニーでは勧めている。

ソニーでは、現在、端末販売だけでなくインフラ製品やサービスとのバンドル販売にも力を入れている。

たとえば、マネージドインターネットサービスである「bit-drive(ビットドライブ)」と組み合わせたビデオ会議システムの利用である。加えて、bit-drive と組み合わせることで、トラブル時の包括的な切り分け対応など顧客メリットもある。

また、2012 年 3 月に発売された、ビデオ会議の様子を録画できる HD 対応レコーディングサーバ「PCS-RS1SET/RS5SET」とビデオ会議端末との組合せも提案している。レコーディングサーバについては、同社で販売しているコンテンツ管理配信システム「OPSGATE(オブシゲート)」と組み合わせることで、編集などの加工やリアルタイムストリーミングなど活用の範囲が広がるという。

端末面においては、6 月末に新しいファームウェアアップデート(Ver.2.36)でビデオ会議時の音の改善を行った。マイクからより離れた話者の声を聴きやすくすることで集音の範囲を改善したり、声のこもり感を軽減したりしている。

ソニーのビデオ会議システムの強みは、(1)国内で設計・製造している、(2)サポートは日本人が実施している、

(3)修理は国内製造のためすばやい対応が行える、(4)ファームウェアアップデートは無償で提供している、など今後も国内メーカーとしてビデオ会議システムのビジネスを強化していきたいと考えている。

アバー・インフォメーション、H.323 テレビ会議と Skype を統合する新ソリューションを発売

アバー・インフォメーション株式会社(東京都千代田区)は、H.323 テレビ会議と Skype を統合する新ソリューション「VCBridge」を 10 月 1 日より販売開始した。(10 月 1 日)



VCBridge (アバー・インフォメーション資料)

VCBridge は、H.323 端末と Skype による映像、音声、共有コンテンツを交えたテレビ会議を可能にするソリューション。

同社では、すでに H.323 に対応した HD テレビ会議システム「HVC130」と、4 地点会議が可能な内蔵 MCU 搭載の「HVC330」を主に小規模から中規模の事業者向けにコストパフォーマンスの高い製品(以下、HVC シリーズ)として販売している。

今回発売した VCBridge は、HVC シリーズのオプションとして提供する。”plugged into Skype”認証取得済み。VCBridge には、H.323 と Skype との間の通信プロトコル変換機能を持たせており、HVC シリーズと USB 接続することで、H.323 と Skype 間の 1 対 1 もしくは多地点でのテレビ会議が行えるようになっている。

「単体の多地点接続装置(MCU)としてではなく、端末(エンドポイント)の機能拡張としての位置づけをもった製品である。」(アバー・インフォメーション)

ただし、Skype は、通信チャネルが 1 本のため、現在は、ひとつの Skype クライアントのみの映像、音声、共有コンテンツを交えた接続のみとなっている。

つまり、テレビ会議時は、映像と音声のみによる通話だが、

そこにコンテンツ共有が入ると、通信チャネルの制限のため、共有コンテンツと音声のみによる通話となる。

たとえば、コンテンツ共有がないテレビ会議セッションの場合は、HVCシリーズとSkype ユーザ双方の映像と音声による会話となるが、コンテンツ共有を始めると、お互いの端末の画面には、共有されているコンテンツ画面のみ表示され、会話は音声のみに切り替わる。逆に、コンテンツ共有を終了すると、もとの映像と音声の会話に戻る。

今後、無償のファームウェアアップデートにより複数のSkype ユーザによる音声での参加も選べる(今年中対応予定)ようになるという。

接続環境によりHVCシリーズとSkype間で最大720pのテレビ会議接続は可能となっている。それ以外では、VGAやQVGAのビデオ解像度設定となっている。



システム構成例（アバー・インフォメーション資料）

今回オプションにSkypeとの接続機能を採用したのも理由がある。ワールドワイドに普及した無料のソフトウェアであるという点だ。しかも、ラップトップ、タブレット、スマートフォンなどあらゆるモバイル機器で利用可能だ。

「Skypeによって、これまで共通のテレビ会議環境を持つことが難しかった取引先をはじめ、出張中や外出先の社員、意思決定者、専門家などが、ノートパソコン、タブレット、スマートフォンなど普段使っている機器から、追加ライセンスや特別なサーバ契約、新IPアドレス取得などが不要で、どこからでもH.323のテレビ会議への参加が可能になる。このVCBridgeの発売によって、HVCシリーズの活用の幅は更に広がると期待している。」(アバー・インフォメーション)

HVCシリーズは、HD解像度に対応しているほか、パソコンや書画カメラなどをカメラ映像と同時に表示するコンテンツ画面共有機能、iPadやスマートフォンなどのカメラ画像を共有するVCLink機能など、テレビ会議に必要な全ての機能が揃ったオールインワンパッケージ。これに加え、HVC330には、4地点接続機能とUSBメモリー録画機能を装備している。

価格については、MCU内蔵タイプのHVC330が参考価格38(379,800円)万円(税別)、1対1接続のみのHVC130が参考価格24万円となっている。

東和エンジニアリング、「テレビ会議クラウドサービス」のサービスを開始

株式会社東和エンジニアリング(東京都台東区)は、「テレビ会議クラウドサービス」のサービスを9月20日より開始。(9月20日)

このテレビ会議クラウドサービスは、同社のTOWAROWクラウドソリューションの第一弾。初めてテレビ会議を導入するユーザも含め、高価な多地点接続装置(MCU)を購入しなくてもテレビ会議多地点接続が定額制の低価格で手軽に利用できるといふ。

このサービスでは、多地点接続サービスのほか、テレビ会議システムメーカーや機種を問わずワンタッチ接続、予約接続などができる「かんたん接続サービス」、出張先などからパソコンやタブレット端末でテレビ会議に接続することができる「モバイルサービス」、加えて、安全に会議を行うためのセキュリティに関しては、「VPNサービス」を提供している。

簡単接続サービスでは、リモコン操作に惑わされることなく直感的にテレビ会議を接続できるという。また予約機能を使うことで指定の時間がくれば自動接続での会議開始が可能。このサービスは同社独自のサービスで、ソフトウェアとしても近日発売する予定となっている。

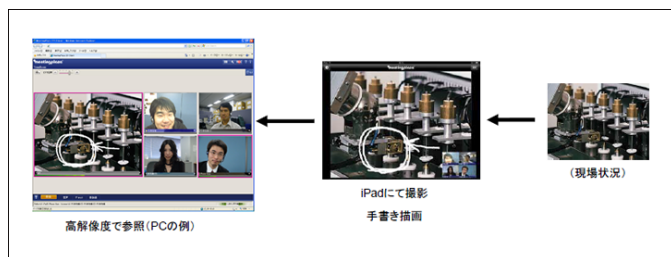
以上のほか、同社では、映像と音響システムの蓄積されたノウハウでテレビ会議環境の構築も行っている。

なお、TOWAROWクラウドソリューションは今後、「同時通訳クラウドサービス」などラインナップを増やしていく方向だ。

NTT アイティ、iPad/iPhone 対応・機能強化した新「ミーティングプラザ モバイル」を提供開始

NTT アイティ株式会社(横浜市中区)は、同社の Web 会議サービス「ミーティングプラザ」において、iPad および iPhone 対応・機能強化し、新「ミーティングプラザ モバイル」として 10 月 1 日より ASP サービスでの標準提供を開始。(10 月 1 日)

今回提供の新ミーティングプラザ モバイルでは、新たに、新しい iPad と iPad2、そして iPhone4S に対応。Android スマートフォン/タブレット端末と同様に、インターネット接続により、簡単・直感的操作で映像送受信・音声/チャット会話・共有資料参照を行いながら遠隔会議に参加することができる。



ミーティングプラザ モバイルの画面表示例【iPad】(NTT アイティ資料)

特長は以下の通り。(1) 音声通話の IP への統合:iOS デバイスでは、これまで音声送受信には電話機能を利用していたが、この新サービスによって、電話機能がないタブレット端末でも PC と同様にインターネット接続によってミーティングプラザの会議に参加可能となる。(2) 最大 32 拠点接続対応:PC から参加する場合と同じく、最大 32 拠点までの顔映像表示を iPad/iPhone で実現。(3) チャット機能:スマートデバイスにおいてもチャット機能によるテキスト発言が可能。(4) HD カメラ画像の共有:HD モード(1280x960)の高解像度のままそこに手書き描画を加えて共有することができる。

同社によると、2012 年の販売目標は、ASP サービスで 300 アカウント。

ミーティングプラザは、2001 年に開発・販売開始をして以来、ASP サービスとシステム販売を合わせた導入実績は、

3,000 社を越えているという。

ビジネス動向-国内

ニューロネット、中小企業総合展に出展、スマートフォンでの多地点会議に強み、会議予約から資料管理まで一連の操作が可能

ニューロネット株式会社(東京都町田市)は、中小企業総合展 JISMEE 2012(10 月 10 日から 12 日)に出展。(10 月 11 日)



ニューロネットブース(ニューロネット資料)

スマートフォンでの多地点会議が行えるところが特長という Web 会議システム「SaaSBoard」や 6 月に発表された見えるコールセンターシステム『もしもしコンシェルジュ』をブースにて紹介。また、特設会場では、SaaSBoard を紹介するプレゼンテーションも行われた。

単にスマートフォンで多地点会議に参加できるということではなく、会議開催に必要な、会議の予約、参加者の招待、会議のホスト、資料共有、そして会議後の資料・データ・履歴管理、会議検索までの一連の操作をスマートフォン上で行える点が他社との違いだ。加えて、SaaSBoard は、iOS や Android に対応し、画面には 6 拠点の参加者を同時に表示することもできる。

「他社のソリューションでは、スマートフォンで会議に参加できたり、資料を閲覧することができたりするが、それに加え、会議の予約からデータ管理までの一連の操作が行えるのは業界では SaaSBoard しかない。」(ニューロネット)

パソコンからスマートフォンへの動きは加速している。スマートフォンを利点を活かした Web 会議は、これまでの方法よりもコミュニケーションの密度が向上し情報共有度が増大するメリットがあると同社では説明する。

ITpro EXPO 2012:VTV ジャパン、専用端末からモバイルまで対応したラドビジョンテレビ会議ソリューションと VTV ジャパン独自開発の操作タブレットを展示



VTV ジャパン株式会社(東京都千代田区)は、日経 B P 主催 ITpro EXPO (10月10日から12日、東京ビックサイト)に出展した(写真左、VTV ジャパン資料)。

今回の出展では、パソコンやモバイル端末(スマートフォン、タブレット)からも参加でき、ポリコム、ソニー等異なるメーカーの端末同士ともスムーズに接続できる RADVISION テレビ会議ソリューションと、VTV ジャパン独自開発のカスタマイズ対応操作タブレット「EasyTouch(イージータッチ)」を紹介。



VTV ジャパンブース (VTV ジャパン資料)

ブースにおいては、ラドビジョン社の 1080p 対応「SCOPIA

Elite MCU5105」に、ラドビジョンの「SCOPIA XT5000」、「SCOPIA Desktop」、「SCOPIA Mobile」、ソニー「PCS-XG55」、ポリコム「HDX6000」の計 5 台を同時に多地点で接続しての映像と音声、データ共有を交えたデモンストレーションを行った。

一方、操作タブレット EasyTouch は、従来のテレビ会議システム用のリモコンで行える操作機能をタッチパネルのタブレットで操作ができるようにしたもの。メーカーを問わず主要なテレビ会議専用端末に対応、メーカーが違う端末でも同じメニュー画面で操作が可能で誰にでも簡単にテレビ会議を操作することができる。さらに、サーバ側でアドレス帳の管理を行うため、新しい登録先や変更を一括で変更でき各端末のアドレス帳に反映できる。

導入においては、技術面と運用面をカバーした保守サービスや、利用促進のための トレーニングプログラムなどを含めたテレビ会議のトータルサービス「VTV Care」で万全のサポートを行うとしている。

NTT コミュニケーションズ、遠隔会議サービスの名称変更

NTT コミュニケーションズ株式会社(東京都千代田区)は、遠隔会議サービスに関するサービス名称変更を発表した。(9月26日)

新サービス名称		旧サービス名称
Arcstar Conferencing	Video Conferencing (ビデオ会議)	Arcstar ユニファイド・コミュニケーション・サービス Video Conferencing
	Web Conferencing (Web会議)	WebConnect
	Audio Conferencing (電話会議)	クリアカンファレンス

サービス名称変更 (NTT コミュニケーションズ資料)

「Arcstar ユニファイド・コミュニケーション・サービス Video Conferencing」、「WebConnect」、「クリアカンファレンス」について、9月26日より、「Arcstar Conferencing」という新しい名称で遠隔会議サービスのラインナップ化を図る。

Video Conferencing においては、パソコン、スマートフォン、タブレット端末を仕様したデバイスフリーのビデオ会議を実現。遅延が少なく簡易なファイル共有が行える。

Web Conferencing においては、会議資料を参加者全員のパソコンで表示してその場で資料の修正や確認をしながら会議が行える。Web カメラを使えば、参加者の映像を映したり、会議の録画も可能。

Audio Conferencing は、固定電話や携帯電話で音声による会議が行える。パソコン、スマートフォン、タブレットから会議開催、操作、資料共有も可能。申込から最短2時間で開通するという。

なお、今回の名称変更にもなうサービス内容、操作方法、利用料金などの提供条件の変更はない。

窓口部署は、同社ボイス&ビデオコミュニケーションサービス部。

セミナー・展示会情報

< 国内 >

会議の効率化を実現！『ConforMeeting 無料体験セミナー』定期開催

日程:11月7日(水)、14日(水)、21日(水)、28日(水)
 ※全ての日程で13:30~14:30、15:30~16:30の2回開催
 会場:NEC 情報システムズ 本社(東京都港区)
 主催:日本電気株式会社、株式会社 NEC 情報システムズ
 詳細・申込:

<http://www.nec-nis.co.jp/topics/event/conformeeeting/seminar.html>

< 海外 >

The WR UC&C Summit - Singapore 2012

日時:11月28日-29日
 会場: シンガポール、Conrad Centennial Singapore
 主催:Wainhouse Research, LLC
 詳細・申込:
<http://www.wainhouse.com/events.php?sec=34&opt=upcoming&event=491>

定期レポート 電子ブック版

CNA レポート・ジャパンでは、毎月2回業界ニュース(定期レポート)を1999年から発行しておりますが、この度、カタログスクウェアさんに、2003年から2011年までの定期レポートを1年毎に合冊していただきました。2012年は1号毎です。

また、先日8月4日には、これまでのPCからの閲覧に加えて、スマートフォンやタブレットからも閲覧できるようになりました。

CNA Report Japan アーカイブ 電子ブック版

2003年-2011年

http://www.catalog-square.co.jp/cna_report/

2012年

http://www.catalog-square.co.jp/cna_report/2012/

定期レポート(PDFファイル)は年間23号発行されておりますが、電子ブックによって1年分を一度にダウンロードできこれまでのように1号毎にPDFをダウンロードする必要はありません。もちろん今までのPDFもアーカイブしています。

電子ブック版は、本のページをめくるようにとても読みやすくなりましたし、また1年単位ですが全文検索もしやすくなりました。定期レポートの読者の皆さんにとっても良いのではないかと思います。

ちなみにこの定期レポートは私にとっては、遠隔会議のリサーチの一環としてまとめているものでもありますし、また、私自身の活動を広げていくための機会への窓口にもなっています。

カタログスクウェア株式会社

<http://www.catalog-square.co.jp>

*遠隔会議業界で長くお勤めされ、今年電子カタログ・ソリューションで起業された方が経営されている会社です。

*この電子ブック版についてご意見等ございましたらよろしくお願いたします。橋本宛 cnar@cnar.jp

編集後記

今号もお読みいただきましてありがとうございました。

各社からのニュースが結構ありまして若干遅れ気味ですが、次号でキャッチアップします。

次号もよろしくお願致します。

橋本啓介